

# 奈良大仏の経済学

新井 宏

お国自慢をする訳でもないが、現存するブロンズ像で、世界最大のものが奈良東大寺の盧舎那仏像であり、第二位が鎌倉の阿弥陀如来像である。奈良の大仏は、高さ約十五メートル（当初は約十六メートル）、重量が約四百トン、鎌倉の大仏は、高さが十二・四メートル、重量が百二十トンである。面白いことに、奈良の大仏が開眼したのが天平勝宝四年（七五二）、鎌倉の大仏の鑄造が建長四年（一一五二）なので、ちょうど五百年の差がある。その五百年間、日本では等身大以上のブロンズ像はまったく造られていない。まさに「国銅尽して」の世界最大の奈良の大仏であった。

もつとも、正確に言えば、大きさだけなら銅板張りのブロンズ像でこれを超えるものがある。ニューヨークの自由の女神像は実身長で四十四メートルほどあり、奈良の大仏が立上っても及ばない。しかし四ミリの程度の銅板張りなので、銅重量では五十トン程度であり、奈良の大仏

が圧倒的に勝る。

現存するブロンズ像だけでなく、世界の歴史をひも解いて見ても、おそらく奈良の大仏が最大である。ただし、対抗馬がふたつある。

ひとつは、世界の七不思議として知られる前四世紀のロードス島の太陽神ヘリオン像である。ロードス港の入口の狭まった兩岸に仁王立ちして、その下を船が運行する様子が、江戸末期には、司馬江漢等によって銅版画や浮世絵で紹介されている。塩野七生の『ロードス島攻防記』よりもはるか前から、江戸の通人達はロードス島を知っていたわけだ。もし絵の通りであれば、世界最大のブロンズ像であったことは間違いない。

しかし、どんな小さな港でも、その入口を跨ぐとしたら途方もなく大きい像になる。自由の女神の股下を通る船を想像しても、小さなボートが精一杯で、とても信じ

がたい。

ところが、このヘリオン像が単なる空想上のものとも云えないのは、ローマのプリニウス『博物誌』に、紀元前三百六年のシリアによるロードス島攻撃の撃退記念として作られ、五十六年後に地震で倒壊したとあるからである。立像で三十四メートル程度と言うのが大方の見方なので、背丈では奈良の大仏よりもやや高い。

それでは、このヘリオス像は、奈良の大仏のような鑄造構造物だったのであろうか。そうであれば、ひとつの鉱山を空にしてしまったとの伝承もうなずけ、無条件に世界一のブロンズ像であったことになる。しかし、事実は芯像の上に銅張りしたハリボテ像だったようだ。

それは、これらのブロンズ原料が、シリア軍を撃退した際の戦利品を利用したものだと言うことによる。そうであれば、とても百トン以上とは考えられない。銅劍一万本を溶かしてもたかだか十トンだからである。その情報に加えて、西暦六五四年にサラセン帝国の將軍が、倒壊した巨像から青銅を剥ぎ取り、それを買い取った商人が九百頭のラクダに積んで運んだとの記録もある。このことから判断すると約百トンである。そもそも、フロンが紀元前三世紀に書いた「世界の七不思議」のピザンチン写本では、十二トン半と書いてある。奈良の大仏のイメージとは大分異なり、これでは三ミリア程度の銅板を巻きつけるのにさえ不足する。

すこし力み過ぎたが、ロードス島のヘリオス像の重量は、奈良の大仏や鎌倉の大仏より大分軽かったというのが確かなところであろう。

もうひとつの対抗馬は、唐の則天武后が作った白司馬坂の大像である。高千尺と称されているが、これでは三百メートルにもなってしまう。白髪三千丈式の表現であり、もちろん実高ではなく、完成したかどうかとも疑われている。全国の僧尼に一日一錢宛の銅貨を課して造ろうとしたもので、十万人の僧尼が一年間毎日協力したとしても、約百四十トンである。

しかも、盛唐期の仏像は、石灰岩や大理石製が主流であり、ブロンズ製は既に下火になっていた。したがって、完成したとしても、鎌倉の大仏程度だったのではなからうか。ただし、時期的に見て、奈良の大仏が白司馬坂の大像の影響を受けた可能性もある。そうであれば、白司馬坂像よりも大きな仏像を狙うのが新興国の心意気であり、この点からも奈良の大仏が勝ると見ることができよう。

その他、時代は下るが九七一年に造られた中国の龍興寺のブロンズ仏像高が、二十四メートルと伝えるが、穴を掘って造ったもので立像であり、奈良の大仏よりも小さい。

なお、近年になってもブロンズの仏像は造られている。富山県の高岡大仏は台座を含む総高が十六メートルで重量は六十五トン、つい最近造られた福岡県篠栗町の涅槃像は伸身長が四十一メートルで二百トンである。仏像ではないが、長崎の平和祈念像は座高が十メートルで三十トン。

一方、「世界的」が大好きな韓国でも大仏をつくる計画がある。大蔵八万経の木版を所蔵していることで「世界的」に知られている海印寺に高さ三十二メートルの青銅大仏を作ろうと云うのである。もちろん世界最大だと称し重量では二百トンくらいになるといだが、反対意見も多く頓挫している。

巨大な仏像と言うだけであれば、バーミアンの大仏立像が五十五メートル、敦煌の北大仏と南大仏が、二十六、三十三メートル、雲岡石窟の北魏の仏立像が十六メートル、盛唐期の龍門石窟奉先寺の半座大仏が十三メートル、ボロンナルワの涅槃臥仏像が十五メートルなどある。しかし、いずれも伸身像であり、しかも磨崖仏などでブロンズ像ではない。だから、磨崖仏を除いてしまうと、相変わらず仏像としては、奈良の大仏が最大である。ついでながら、現存の世界最大像として、しばしばロシアのボルゴグラード(スターリンググラード)の「母なる祖国の像」が五十一メートルだと紹介されるが、これは

振り上げた剣の先までの高さで、実身長は「自由の女神」に劣る。

このように、世界史上から見ても、おそらく最大と考えられる奈良の大仏が、銅産に恵まれた日本に生まれたのであれば納得が行く。ところが、日本が銅産国に飛躍したのは、室町時代以降であり、奈良時代は銅の国産化がやっと始まったばかりであり、生産量も国際的に見ても、かなり低水準であった。奈良時代の銅産はせいぜい年五十トン程度で、平安時代には二十トンにも満たない。その十年分を全て投入して、造ったのが奈良の大仏なのである。

なぜ、このようなバランスを欠いた事業が、推進されたのであろうか。その経過を簡単に辿ってみよう。

聖武天皇が紫香楽宮で、盧舎那仏の建立を「菩薩の大願を發して盧舎那仏の金剛像一軀を造り奉る。国銅を尽して象を鎔かし、大山を削りて以て堂を構へ、広く法界に及ぼして朕が知識と為す」と発願したのが、天平十五年(七四三)である。その二年前の天平十三年には、正式な国分寺建設の開始を告げる詔が出され、更にその前年には、藤原広継の乱があり、恭仁京への遷都が行われている。また発願の翌年の天平十六年には、難波京に遷都し、更に平城京に復している。混乱と激動の時代であ

った。そんな中で、そもそものは、紫香樂に造営するつもりであった大仏が、現在地の東大寺に設置されることになる。

聖武天皇に、大仏建立を働きかけた人物は行基であり、それを仲介したのが、天皇の側近の橘諸兄である。行基は長い間朝廷に認められず「小僧」とさえ呼ばれていたが、この時期に天皇と肝胆相照らす間柄になる。そして聖武天皇と行基が、国分僧寺・国分尼寺の総仕上げとしての総国分寺を造り、仏教的な慈悲で国を統治しようとしたのである。

このような説明が、おおよそ現在言われている大仏建立の事情である。それに加え、前述したように、則天武后の巨大ブロンズ像の計画があったことも知っていたであろう。しかし、なぜかくも巨大なブロンズ像が必要であったかについては、相変わらず杳然としない。

「国銅を尽して」造られた東大寺の大仏のため、それ以降、日本では、等身大以上の金銅仏が全く造られなくなり、それが復活するのが、五百年後の鎌倉大仏であることは既に述べた。この間、すなわち奈良時代後期から鎌倉時代の初期まで、鑄銭用の銅が確保できず皇朝十二銭の発行が中止されたとか、十世紀後半から十二世紀までの間、梵鐘の鑄造が完全に途絶えたとか、銅の欠乏時代は続くのである。

このように、「国銅を尽して」しまった東大寺大仏を、どう位置付けるか、納得行く説明が求められているように思う。

このことについての筆者の見方は、律令政府の経済政策だったとする点にある。すなわち、大仏建立に三十年ほど先立つ「和銅開珎」の発行が大仏建立をもたらした最大原因だというのである。もちろん、こんなことを主張する学者はどこにもいない。だから解説する。

和銅開珎は日本の通貨の始まりである。近年になってそれよりも古くから富本銭が存在したと言うが、厭勝銭（厄除け用）としての用途があり、流通量も限られていた。したがって和銅開珎は教科書通り実質的な通貨の始まりなのである。

それではどんな性格をもった通貨だったのであろうか。結論から言えば、最初から銅地金価値とは全くかけ離れた、いわば紙幣のような通貨として発行されたものであった。筆者の調査では当時の銀と銅の比価は百倍程度なのに、銀銭と銅銭の比は十倍で、律令政府は銅銭発行によって膨大な利益を得ることができたはずである。

打出の小槌を得た律令政府は、それを平城京造営の資金としてつぎ込む。さらには、通貨増発によってもたらされたバブル経済は二十年後に天平文化の花を開か

せる。

しかし同時に、地金価格と大きく乖離した銅銭は、私鑄銭の氾濫を生み、激しいインフレに見舞われる。大仏建立が発願された天平十五年は、和銅から約三十年目に当り、当初一石三十三文に設定した米価が約四百文に、すなわち物価が十倍に高騰した時期である。その一方では、銅銭発行によって景気が刺激されて、長門国の長登銅山などで銅産が活発になる。

しかもこの頃、律令政府は、やたらに恭仁京とか難波京とかに遷都をしている。通貨発行による出益を、もう一度蘇らせ、なんとか好景気(バブル)を継続したい。そんな思惑が、為政者の間に生まれたとしても、平成バブルを知る我々としては、直ちに納得が行くであろう。通貨発行による出益は、いわば隠れ国債である。赤字国債を発行してでも、公共事業投資は盛んにしなければならぬ。そんな声が満ちていたように思う。

しかし銅産が盛んになり、物価が上昇することで、実質的な銅銭の価値は下落するばかりで、通貨発行の出益は、この頃ほとんどゼロに近づきつつあった。銅を大量に市場から引上げなければ、銅貨発行による出益など、全く期待できない。いわば、買いオペを行って、市場から国債を引上げなければならぬ状況が出現したのである。

そして生まれた政策が、大仏建立である。壮大な公共

投資を行いながら、市場から銅を引上げ、和銅の銅貨の価値を高めて物価を安定させ、出益を得る。まさに一石三鳥の経済政策である。

似たような状況が江戸時代にもあった。文化文政期、当時の幕府は「一分銀」という紙幣のような貨幣を出して、当時の幕府財政規模の年二百万両の十倍近い千八百万両の出益を得た。膨大な隠れ国債である。このため結局はペリーの開国によってその高いツケを払わされ、幕府は崩壊した。

常軌を逸するような大仏建立が、いくら聖武天皇の信仰心が厚いからと言って、簡単に成立つ訳がない。そこには、必ず政治的・経済的なニーズが含まれていたに違いない。そんなことから、大仏建立を観ると、歴史の裏が見える。事実、その後かなり物価が下がり、和銅開珎の価値があがって行くのである。

さて、それでは、東大寺の大仏造営事業とは、どの位の経済規模のプロジェクトであったのだろうか。幸いなことに、東大寺大仏建立に関しては、『東大寺要録』に、かなり詳細な記録があり、その経済規模を算出できる。それによれば、

熟銅

七三九五六〇斤(一一〇〇〇〇貫文)

白鐵(錫) 一二六一八斤 ( 五七〇〇貫文)  
 鍊金 一〇四三六兩 ( 九四〇〇貫文)  
 水銀 五八六二〇兩 ( 四七〇貫文)  
 炭 一六六五六斛 ( 一五〇貫文)  
 使用人工数 二六〇三六三八人 ( 三〇二〇〇貫文)  
 とある。( )内は、その当時の銭価に換算した値で、  
 おおよその目安であり、その総合計金額は、一五・六万  
 貫文になる。当時の労働工数に換算すれば一五六〇万勞  
 働日と言うところであろうか。ちなみに、現代の一労働  
 日を一万円とすれば、一五六〇億円に相当する。  
 とここで、この国家プロジェクトを、古墳時代の巨大  
 前方後円墳の製作費と比較して見よう。大仙山古墳(仁  
 徳天皇陵)の体積は約百四十万立方メートルであり、一  
 立方メートルあたりの工数を、四・五日として計算すれ  
 ば、総工数は約五百万日になる。NHKの依頼により大  
 林組が、古代工法で工数を見積もった時も、延べ六八〇  
 万人と出ているから、おおよそ妥当なところであろう。  
 そうすると、東大寺の大仏の製作費は、巨大な前方後  
 円墳の三倍程度ということになる。古墳時代の人口は、  
 奈良時代の三分の一強であったから、人口比では同程度  
 と言ったところであろうか。もつとも、大仏建立には、  
 その他に伽藍造営の膨大なコストがかかっている。そう  
 違和感のない数値といえるだろう。

歴史的に見ると古墳時代は本当に銅の乏しい時代であつた。三百年間の古墳時代を通じて、各遺跡から発掘された銅の総量は、わずかに一トンに過ぎない。それに比べると中国では、漢代の地方政権である曾侯乙墓から一度に十トン以上も青銅器が出土していて比較にならな

い。この状況が一変するのが飛鳥時代であり、そのトツプを切つたのが、日本最初の寺院、飛鳥寺の丈六像すなわち飛鳥大仏である。『元興寺縁起』によれば、推古十三年(六〇五)、銅二三〇〇斤(約十四トン)、金七五九兩(約十キロ)をもつて、丈六像とその挟侍像が造られたとある。当初の鑄造部分は、頭部と右手指にしか残っていないが、それでも止利様式を良く伝えている。

同縁起によれば、金七五九兩の内三二〇兩は、高麗国の大興王が献上したものだとする。後世の潤色とする説が有力であるが、ここで注目すべきなのは、金については朝鮮半島からもたらされたことを伝えながら、銅については、その伝承が見られないことである。和銅に先立つこと、ちょうど百年である。素材の総価格から見ても、銅の方が負担だったはずである。したがって筆者は、もうこの頃には、銅の国産が始まっていたのではないかと考えている。

さて、飛鳥・白鳳期には、この他にも数多くの小金銅

仏が造られたが、その後の大型ブロンズ像を追いかけてみると、まず山田寺講堂にあった丈六像(六七八年)が挙げられる。後に、興福寺に奪われたが、そのおかげで現在は仏頭のみであるが興福寺に残っている。その残重量だけでも約一トンあり、仏体を丈六とすると、総体では十五トン程度の巨像であったと考えられる。

その後のブロンズ像で著名なのが、薬師寺の金堂の薬師三尊(薬師如来と日光菩薩、月光菩薩)や同じく講堂の薬師三尊である。前者については、本薬師寺から移設されたものか(それなら白鳳期)、現在地で造られたものか(それなら天平期)を巡って、喜田貞吉や関野貞などの間で、激しい論争が行われたことがある。当時は、法隆寺再建・非再建を巡って、両者の間で、論争が行われていた最中でもあり、国民的な関心を呼んだが、現在では三尊は移座、建物は新築されたとする説に落ち着いたようである。本尊の薬師如来像は三々四トンであり、三尊あわせて六々七トンと言うところであろうか。この薬師如来像は、外観から、ロストワックス法による一回鑄造と見られていたが、内部には型の継ぎ目が数十ヶ所もあり、当時の鑄造容量の限界を示唆している。なお、現在薬師寺の講堂に安置されている薬師三尊が、その後の天平期のものである。

そして、東大寺の大仏の鑄造が始まる。そこには、間

違はなく技術的な飛躍がある。そのため、技術導入が図られたに違いないと考えるのが大方であるが、史書は何も伝えない。造東大寺次官の国中連公麻呂が、技術面の責任者を勤めたが、彼は百済の帰化人の後裔で、当初は正七位の低い位からスタートしており、唐への留学経験はない。どうも白鳳・天平の鑄造師であったようである。

平安末期の重源の大仏補修時には、宋から鑄物師の陳和卿を呼んでいる。もつともこの頃は、日本におけるブロンズの大型鑄造技術は、完全に途絶えており、鑄鉄の釜を作る技術者が動員される状況であって、天平期とは異なり、技術指導を受けることが不可欠になっていた。ちなみに、その時使用された原料は、『東大寺造立供養記』によれば、熟銅八三九五〇斤(約五十トン)、黄金千両、金薄十万枚、水銀一万両で、天平創建時のほぼ十分の一の規模である。ついでに言えば、江戸時代中期の大仏補修では、唐銅を六五七四貫(二十五トン)用いている。それにしても、三回とも使用された原料の詳細が残っているのは、日本ならではと言えるであろう。

奈良の大仏については、どうやって造ったかをめぐる論争がとて面白い。しかし、経済論議に続いて技術論議にまで、ひとり悦に入っていると、『まんじ』を首にされそうである。止める。